奈文研ニュース

No.60 Mar.2016

NABUNKEN NEWS

NARA CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577奈良市佐紀町247番1
http://www.nabunken.go.jp

ミャンマーでの研修事業

近年、ミャンマーがニュース等で取り上げられる機会が多くなっています。政治的な動きに関する報道が多いですが、経済関係とともに文化について報じられることもあり、以前よりは身近な国と感じられるようになってきているのではないでしょうか。奈良文化財研究所は、1994年度から2000年度にかけて、ミャンマーとの間で考古学専門家の研修事業をおこなっていました。長い中断がありましたが、2013年度より文化庁の拠点交流事業を受託した東京文化財研究所から考古分野を委託されて、以前と同様の事業を実施しています。

研修は、ミャンマー文化省考古・国立博物館局の専門家に対しておこなうもので、ミャンマーでの現地研修と、日本に招へいしての研修とを毎年実施してきました。考古・国立博物館局は、大学のような施設として「考古学フィールドスクール」を設置して若手職員に対する専門教育を進めているので、その場を利用させていただいて現地研修をおこないました。このスクールは、2014年に世界遺産として登録されたピューの古代都市群のひとつであるシュリ・クシェトラ遺跡の中にあります。この立地を活かし、写真の撮影手法を研修する時には、広大な遺跡の中に点在する遺構も撮影の対象とすることができました。シュリ・クシェトラ遺跡は、ピィという比較的大きな町の近くに位置しており、ヤンゴンからは車で6時間ほどかかります。アクセスは少し大変ですが、世界遺産への登録もあって観光客が急増しているそうです。

奈文研は、2013年度に土器の観察と実測に関する研修、2014年度は文化財写真についての研修、そして2015年度は遺跡整備に関する研修をおこないました。専門家を日本に招いておこなう研修も、それぞれの年度でミャンマーでの現地研修と対応するものを実施しています。意外に思われるかもしれませんが、ミャンマーでは長年にわたり、遺跡の発掘調査や宮殿跡の復元整備などが、国家事業として独自に継続しておこなわれてきており、考古学関係者の意欲は大変高いものがあります。毎年の研修でも受講生はとても熱心で、講師に対してたくさん質問も寄せられています。私たちも、多様で豊かなミャンマーの考古遺跡について知るにつれ、奈文研が持っている文化財関係の様々なノウハウを伝えるという研修事業が、知識を一方的に伝えるのではなく、何かを共同で作り上げていくことのように感じています。

（企画調整部　森本 晋）

土器の実測実習

遺跡の整備計画実習

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第186次）

藤原宮の中心部の下層には幅6～9m、深さ2mほどの大規模な南北溝が貫流しています。この溝は、宮の造営に関わる資材を運搬するための運河であると考えられ、現在までに藤原宮北面中門から朝堂院までの南北570mで確認されています。大極殿や大極殿院南門は、運河を埋め立てた後に造営されたことがわかっています。

1977年の第20次調査では、この運河から天武天皇末年の木簡が出土し、藤原宮の造営がこの頃には本格化していたことがあきらかになりました。このように、運河は藤原宮造営過程を理解する上で重要な遺構です。今回は大極殿院内庭の中央部南側で、藤原宮期の遺構を保存しつつ、南北約6mの範囲で運河を調査しました。

検出した運河の規模は、幅約6.7m、深さ約1.8mでした。最下層には粗砂が堆積しており、この層は運河が機能していた時のものです。この粗砂層からは多量の土器、木製品、種子類が出土しました。また、獣骨が大量に出土していることも特筆すべき成果で、これまで確認しているものには、馬、牛、犬等があります。特に馬については、完形の頭蓋骨が3個体出土しており、その年齢、性別、出自、利用方法等の解明が期待されます。

昨年度と今年度の調査で、大極殿院内庭の南半部の様相があきらかになりました。古墳時代から平安時代まで様々な成果があがり、今後の調査研究のための重要な資料が得られました。

（都城発掘調査部　大澤 正吾）

運河完掘状況（南東から、右奥が大極殿）

藤原京右京八条二・三坊の調査（飛鳥藤原第185-7次）

今回の調査地は、藤原京右京八条二坊の西辺にあたり、本薬師寺の寺域に隣接します。西二坊大路および八条条間路の存在が予想され、東側溝と西側溝が推定される2箇所に調査区を設けました。

調査の結果、7世紀後半から藤原宮期の遺構として、西二坊大路の東西両側溝と八条条間路の南側溝を検出しました。西二坊大路東側溝と八条条間路南側溝は逆L字状に接続していました。

また、西二坊大路の路面整地土下層の遺構として、東区では調査区を縦断する南北溝を、西区では調査区を横断する斜行溝を検出しました。東区の下層南北溝は西二坊大路東側溝のわずかに西側を並走していました。西区の下層斜行溝は、幅約2.7～3.7m、深さ約0.6～0.9mで、西二坊大路西側溝はこの溝を埋め立て、路面側、寺域側の両方を整地した後に、掘り込まれていました。

今回の調査により、当地における西二坊大路の施工過程があきらかになり、本薬師寺および藤原京造営の過程を考える上で、新たな知見を得ることができました。　（都城発掘調査部　大澤 正吾）

東側溝と南側溝、下層南北溝（東区、北西から）

西側溝（西区、北から）

発掘調査区全景（北から、右側が本薬師寺）

興福寺中室・経蔵・鐘楼の調査（平城第559次）

興福寺では現在、「興福寺境内整備基本構想」（1998年）にもとづき、寺観の復元・整備が進められています。これにともない奈良文化財研究所では、中金堂院や南大門、北円堂院、西室等の発掘調査を継続しておこなってきました。今回の調査は、中室・経蔵・鐘楼を対象とするもので、調査期間は2015年10月２日から2016年１月15日まで、調査面積は計835.5㎡です。

中室は、中金堂と講堂の東・西・北をコの字型に取り囲む僧房（僧侶が生活する建物）のうち、東僧房の呼称です。西僧房は西室、北僧房は北室と呼ばれていました。経蔵（お経を収蔵する建物）は中金堂の北東に、鐘楼（鐘つき堂）は中金堂の北西に建てられていました。

中室・経蔵・鐘楼の建立年代は、中金堂やその周辺の建物と同じく、奈良時代初頭と考えられます。いずれも、建立以後８度ほど火災に遭い、享保２年（1717）に焼失してからは、再建されることなく現在に至っています。調査前、経蔵と鐘楼は基壇状の高まりを残しており、地表に礎石の上面が見えていました。また、中室の北半でも同様の状態の礎石が確認できました。

調査の結果、中室・経蔵・鐘楼の礎石やその据付穴・抜取穴、基壇外装等を検出しました。特に中室では、創建期のものとみられる凝灰岩製の基壇外装が、非常に良好な状態で残っていました。

残存する礎石は、一部動かされているものもありましたが、多くは創建当初の位置を保っており、再建の際にはその位置や規模を踏襲していることがわかりました。建物の規模は、中室が東西約12.4m、南北約62.8m、経蔵が東西約6.5m、南北約10.1mです。鐘楼は部分的な調査のためはっきりしませんが、経蔵と同規模だったとみられます。また中室は、西室とほぼ同規模であるものの、柱の配置が異なり、一部屋の大きさが違っていたと考えられます。

建物の周辺の様相についても、新たな知見が得られました。経蔵・鐘楼の北では、東西方向に延びる幅約50㎝の石組溝と幅1.3m以上の玉石敷が、経蔵の西では、南北方向に延びる幅約２mの玉石敷が見つかりました。石組溝は、講堂周辺の排水のための溝、玉石敷は、建物どうしを結ぶ通路の可能性があります。

今回の調査では、興福寺創建期の伽藍中枢部の実態に迫る、貴重な成果を得ることができました。いっぽうで、新たな疑問も浮かびました。東西対称の位置にある僧房は、柱の配置まで含めて対称であるのが一般的です。なぜ、興福寺の中室と西室は、柱の配置が異なっているのでしょうか？その背景については、今後、文献史料等とも照らし合わせながら追究していきたいと思います。

（都城発掘調査部　桑田 訓也）

経蔵（手前）・中室南端（奥）調査区全景（北西から）

中室北面の創建期基壇外装（西から）

法華寺旧境内出土施釉磚

平城宮跡資料館ミニ展示「発掘速報展　平城2015」第Ⅰ期では、特集展示「煌めく施釉磚の世界」として、2014年3月、平城宮の東に隣接する法華寺旧境内の住宅建設にともなう発掘調査（第532次調査）で出土した施釉磚（せゆうせん）をご紹介しました。

施釉磚とは、緑色や黄色の釉がかけられたレンガのことで、主に刻線文二彩磚（こくせんもんにさいせん）（表面に直線を刻み、二色の釉がかけられた磚）、水波文緑釉磚（すいはもんりょくゆうせん）（表面に波のような文様を刻み、緑色の釉がかけられた磚）、緑釉磚（緑色の釉がかけられた磚）の3種類があります。

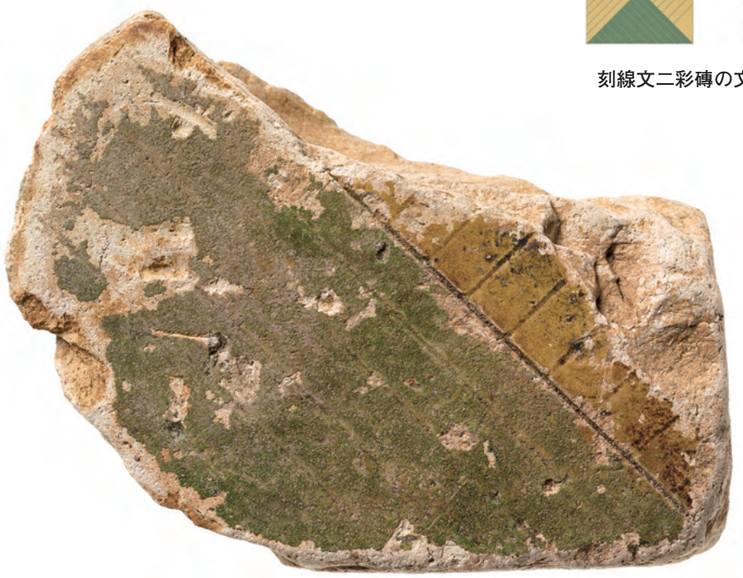
これらが出土した場所は、法華寺旧境内の金堂や講堂の近くに集中しており、刻線文二彩磚と水波文緑釉磚が同じ場所で出土する傾向にあることがわかります。また、表面の文様や釉の配色、裏面に刻まれた数字（番付）等を総合的に検討すると、一案として下図のような敷き詰め方を示すことができます。

これらの施釉磚は、御仏（みほとけ）をまつる金堂や講堂の須弥壇の上面を煌びやかに荘厳していたのでしょう。

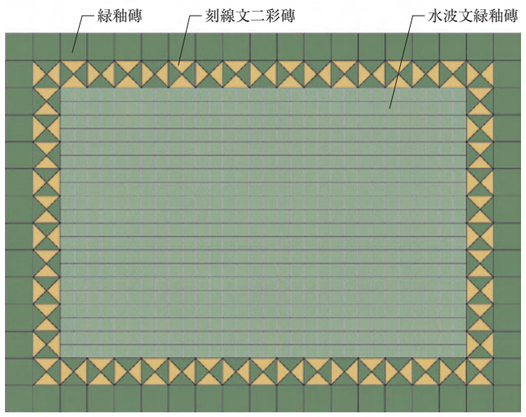
（都城発掘調査部　中川 二美／企画調整部　中村 玲）

水波文緑釉磚（裏側）

刻線文二彩磚の文様構成案



刻線文二彩磚（原寸大）



施釉磚の使用想定案

法華寺旧境内出土施釉磚

日韓発掘交流に参加して

2015年10月５日から11月27日まで、日韓発掘交流事業により、韓国の国立慶州文化財研究所に滞在し、発掘調査に参加しました。発掘交流事業は今年で10年目の節目の年を迎えましたが、これまでにも多くの先輩達が韓国での調査に参加し、また奈良文化財研究所でも受け入れをおこなってきました。

10月は５世紀の新羅の墓域であるチョクセム古墳群の分布調査に参加しました。本年度の調査地区は戦前に朝鮮古蹟研究会が古墳を発掘調査した地区で、その古墳の正確な位置や周辺の状況の確認が主な目的でした。11月には場所を移し、統一新羅時代の東宮跡と推定される新羅王京遺跡の発掘調査に参加しました。長期にわたって発掘調査を継続してきた地区で、本年度は主に断ち割り調査による下層の状況の確認をおこないました。

どちらも膨大な量の礫石を用いた遺構が良好に残る遺跡で大変感動的でしたが、それゆえ普段経験する発掘調査とは趣が異なり大いに悩まされました。韓国の研究者と片言の韓国語で意思疎通をはかりつつ調査を進め、たどたどしいながらも、調査の方針や遺構保護の考え方、今後の活用のあり方などについて、まさに遺跡を目の前にしながら話し合うことができ、多くのことを学ぶことができました。

コスモスの盛りから紅葉を経て、最後には初雪の中キムチを漬け込む時期までの滞在となりましたが、世界遺産慶州歴史地区の折々の姿を眺めつつ、文化財の調査研究のまさに第一線で活躍する同世代と深く交流できたことは、得がたい経験となりました。今後も、奈文研と慶州文化財研究所の絆と交流がますます深まることを期待します。

（都城発掘調査部　川畑 純）

発掘調査への参加風景

デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用

遺跡整備研究室では、これまで遺跡整備の実務に携わる行政担当者・研究者等を対象とする研究集会を実施してきました。2015年度は「デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用」をテーマに、12月18日に開催し、参加者は117名でした。

近年、遺跡現地での理解促進を目的とする、デジタルコンテンツの導入が盛んになってきました。特に、スマートフォン等のカメラを通じて映し出された遺跡現地の映像に、CGで作成した復元建物等を重ねて映す技術を、AR（＝Augmented Reality：拡張現実感）技術といい、注目されています。この技術を用いれば、遺跡に復元建物等の整備をおこなっていない場合でも、来訪者が遺跡のかつての景観を追体験することが可能となります。また、ご当地キャラを映し出して共に記念写真が撮れる等の遊びの機能をもたせることで、身近に歴史を学ぶ仕掛けとする等、観光振興の側面での効果も期待されています。いっぽう、これらのシステムの更新・維持管理をはじめ、課題も多く、これらの技術開発の最前線、全国の現状、問題点の共有を目的に研究集会を実施しました。

研究集会では、「バーチャル飛鳥京プロジェクト」等に取り組む東京大学生産技術研究所の大石岳史先生のほか、既にシステムを導入した地方公共団体の担当者２名、アプリ開発の最前線に立つ開発技術者２名にご報告いただきました。また、平城宮跡第二次大極殿跡等で、AR技術を用いたアプリのデモを実施し、参加者に好評を得ました。

今後も遺跡整備研究室では、遺跡の現場で必要とされる調査研究を続けていきます。

（文化遺産部　高橋 知奈津）

平城宮跡第二次大極殿跡でのデモの様子

奈文研での日々

1987年6月、奈良文化財研究所に入所。発掘調査は先輩諸氏の指導のもと、どうにかついていく。測量だけは細心の注意。平城宮跡の整備では、東院庭園の整備が思い出深いとともに、携わったサイン計画の説明板や路面地図が今も機能しているのが嬉しい。

98～2001年は飛鳥藤原宮跡発掘調査部。その頃、明日香村が酒船石遺跡で亀形石槽等を、橿原考古学研究所が飛鳥京跡苑池を発掘。それらを間近で見られたのは、庭園史研究者として幸運だった。

01年に奈文研独法化にともない新設の文化遺産部遺跡研究室へ。全国の遺跡整備と庭園史の研究。5か月間だけ埋文センターで室長を務めた後、04年3月に文化庁に異動。文化庁での仕事は大変だったが、貴重な経験をさせてもらったことに感謝。

09年に奈文研に戻り、文化遺産部長。管理的な仕事とともに、専門分野の庭園史・遺跡整備の研究。13・14年は、副所長との兼務で都城発掘調査部長（平城）。あらためて現場の楽しさ・厳しさ、若い研究員の意欲を実感。2015年は副所長専任。

振り返ると、いまの私があるのは本当に奈文研のおかげと実感します。深く感謝するとともに、我が国の総合的な文化財研究の中核をなす研究所として、個々の研究員・職員の自覚のもと、奈文研が益々発展していくことを心から期待しています。　（副所長　小野 健吉）

七年間の記憶

53歳の年、私は20年以上勤務した京都国立博物館から奈良文化財研究所に異動となった。最初の2年間は都城発掘調査部の考古第一研究室長であったが、奈文研で一番楽しかったのはこの時期のような気がする。当時の平城の室員は和田一之輔さん、城倉正祥さん、国武貞克さんの3名で、翌年、和田さんが文化庁に転出し芝康次郎さんが新室員となった。若くまだ柔軟な好奇心を持つ彼らに、考古資料だけでなく伝世文化財を含めた物質文化の総体についての知識が考古第一の仕事には役立つことを正倉院展の見学等を通じて様々な機会に教え、奈文研職員がほとんど無関心であった近世考古学の面白さ等も伝授したつもりである。また、深澤芳樹さんから引き継いだ第一次大極殿院の学報を、森川実さんや北野智子さんの大変な努力により2011年春に何とか刊行できたことも思い出に残っている。

自分自身の研究では、2011年刊行の京大隊によるパキスタン・ラニガト遺跡の報告書でガンダーラの仏教時代の土器編年を発表したこと、2012年に弥生文化博物館と安土城考古博物館で相次いで開催された銅鐸展の図録に、それまでの研究を纏めて発表したこと等が思い浮かぶ。

60歳、まだ老いる年でもあるまい。やり残した、近世・近代の土器作り関係資料の整理等もある。自分の研究を楽しみ、さらに深めたい。

（埋蔵文化財センター長　難波 洋三）

いつのまにか　時が過ぎ

私が最初に奈良文化財研究所に赴任したのは1996年春、前任地は京都でした。新任地への不安と期待との緊張感の中で、新任挨拶等を考えていたことが今となっては懐かしく思います。あれから20年が過ぎ、西大寺駅周辺の風景も大きく変わりました。そして平城宮跡も。奈文研での仕事は、まず、「何もわからない」「何もできない」から始まりました。それまで文教施設の整備に関わって約20年、建設工事のことを少しは分かっているつもりでいたのですが、そんな自信は跡形も無く消えてしまいました。まず部材の名前がわからない、意味がわからない、調べようにもその方法すらわからない。図面も描けない、積算もできない、現場監理など出来ようはずもない。そんなとき手を差し伸べてくれたのは先輩職員であり、研究員であり、設計委託者、施工者の人たちでした。そのおかげでそれからは「尋ねること」「知ること」「みること」「経験すること」を繰り返す日々が始まりました。時は、朱雀門、東院庭園復原整備のまっただ中でした。そして復原整備が完了する頃には、もはや木造建築特有の魅力にとらわれていました。過ぎた時の中で、巡り会えた人たち、支え導いてくれた人たちへの感謝、そんな自分を包んでくれた平城宮跡に感謝を込めて。老兵は今しばらく平城宮跡で恩返しの時を過ごします。　（研究支援課長　今西 康益）

今西課長・小野副所長・難波センター長（左から）

飛鳥資料館　春期特別展「文化財を撮る―写真が遺す歴史」

文化財を守り、伝えるうえで、文化財写真は重要な役割を担っています。奈良文化財研究所では、様々な文化財の調査研究にあたり、多くの写真を撮影し、学術情報として保存してきました。

今日では、文化財を撮影した写真そのものが、歴史資料として文化財の範疇に加わるようになりました。既に失われてしまった文化財や、地中に埋め戻された遺跡の様相、文化財の経年変化を記録した写真は、実物にも匹敵する資料といえます。いっぽうで、文化財の新たな魅力や、文化財への新たな視点を引きだす鑑賞用の写真も、文化財写真の技術者たちの腕の見せ所です。

また、近年の技術革新の波は、フィルムカメラからデジタルカメラへの急激な移行を迫っています。奈文研では、フィルムのデジタルアーカイブの作成等、写真資料の残し方の研究も進めています。

文化財の魅力を多くの人々、そして未来に伝える文化財写真。本展覧会では、文化財写真の歴史と技術の展示を通して、その価値と面白さをご紹介します。　（飛鳥資料館　西田 紀子）

会　　期：４月26日（火）～７月３日（日）　月曜日休館、ただし５月２日（月）は開館
開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）
講 演 会：５月28日（土）　14：00～　「飛鳥の文化財を撮る眼（仮）」　講師：井上直夫　於：飛鳥資料館講堂（事前申込不要）
イベント：なりきりカメラマン―文化財写真技師の仕事体験　６月24日（金）　10：00～、13：30～、於：飛鳥資料館講堂
※イベントは事前申込制、申込方法等の詳細は飛鳥資料館ホームページ・チラシをご覧下さい。
ホームページ：http://www.nabunken.go.jp/asuka/　お問合せ：☎0744－54－3561（飛鳥資料館）

平城宮跡資料館　大型デジタルサイネージ設置

デジタルサイネージ（右側）

平城宮跡資料館では、2015年11月より入口付近に大型のデジタルサイネージを設置し、奈良文化財研究所公式facebookページの記事を公開しています。奈文研が主催する講演会やシンポジウム等のイベント案内をはじめ、現地説明会等の報告、「コラム作寶樓」や読売新聞に連載中の「探検！奈文研」、桜の開花の様子等、平城宮跡の季節の情報を週に一度のペースで更新しています。奈文研の多岐にわたる活動や、お問合せの多かった平城宮跡の旬の情報等最新の状況をお知らせできるようになり、好評をいただいています。

資料館を訪れた際には、ぜひデジタルサイネージで奈文研の最新情報をチェックしてみてください。　（企画調整部　中村 玲）

開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）
休 館 日：月曜（月曜が祝日の場合は翌平日休館）
ホームページ：http://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/　お問合せ：☎0742－30－6753（連携推進課）

■　お知らせ

飛鳥資料館春期特別展
２016年４月26日（火）～７月３日（日）
「文化財を撮る―写真が遺す歴史」

■　記　録

文化財担当者研修（専門研修）
○遺跡等環境整備課程
２016年１月12日～１月22日　14名
○保存科学Ⅲ（応急処置）課程
２016年２月15日～19日　９名

文化財担当者研修（特別研修）
○埋蔵文化財デジタル写真研修
２016年３月８日～11日　16名

平城宮跡資料館ミニ展示
（第Ⅰ期）2015年12月５日（土）～１月31日（日）
「発掘速報展　平城2015」　10,003名

飛鳥資料館冬期企画展
「飛鳥の考古学2015―飛鳥の古墳調査最前線―」
２016年１月29日（金）～３月６日（日）　2,504名

現地説明会等
○平城第552次発掘調査　現地見学会
平城京朱雀大路跡
２016年３月５日（土）　680名

■　最近の本

○海野 聡
『奈良時代造営建築と維持管理』
吉川弘文館　2015年11月
○第18回　古代官衙・集落研究会報告書
『官衙・集落と土器Ⅰ』
㈱クバプロ　2015年12月

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　http://www.nabunken.go.jp
Ｅメール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　２016年3月